

あいほら やすのぶ
相原 康伸

新しい年を迎えて

●連合・事務局長

明けましておめでとうございます。

本年も皆様にとり輝かしい1年となりますよう心よりご祈念申し上げます。

さて、昨年10月の連合第15回大会で新たに事務局長に就かせて頂きましたが、時の刻みの速さも手伝い、瞬く間に新年を迎えることとなりました。そうした私が、「新米」の労調協理事として新年のご挨拶をさせて頂くのは、本年の平安を祈るだけでなく、雑然とした頭の中を整理する上でも、大変貴重な機会となりました。ただ、「整理整頓」にお付き合い頂くのは誠に恐縮なことです。

1. 長寿化

- 職場における安全と健康の確立は、労働組合の基本的な機能です。ましてや、人生が長くなればなるほど、就業期間を通じた健康づくりも重要性を増していきます。労働運動のカバー範囲や念頭におくべき時間軸を再設定することも自然なことと言えます。既に、いわゆる、健康経営も指標化されていますが、「健康」を労働組合ならではのアプローチから捉え直し、運動を開発し育てていくことも夢のある話です。労働組合の社会的価値の再定義と言っても過言ではありません。
- 同時に、働くことを通じ獲得した一人ひとりの人的資源（知見、経験、技能、ネットワークなど）、その総和をどのようにして、社会還元していけるかも重要です。組合員やご家族にとって、長寿化をリスクにしないことはもとより、社会全体の生産性

を高めるうえでも、リタイアされた皆さんの「浮かべれない魂」を地域や家庭に浮遊させない取り組みを再評価してはどうか。

- 一方、「リカレント（教育）」なるワードを耳にしない日はありません。企業内でのOJT機能の低下も由々しき問題ではありますが、リカレントが日本の先行きに大きな意味を持つことは疑いのないことでしょう。しかし、今の日本には少なくとも、リカレント的な日常を育む雰囲気や前進させる環境が十分整備されているとは思えません。長時間労働しかり、性差による役割意識しかり、誰もが潜在的にもっている好奇心や伸びる意欲を形にする上での障害の大きさも痛感します。ここも労働組合の出番と再認識するところ です。

2. ジェンダー

- この度、二つの地方連合会において、お二人の女性会長が誕生しました。連合宮崎の中川新会長、そして、連合奈良の西田新会長です。ネットニュース・地元紙でもその誕生が大きく報じられています。私もニューフェースの新たなエネルギーに期待致したいと思います。昨年末にはお二方へのインタビューも終えました。お二人のお話は、月刊連合1・2月合併号にも掲載しています。女性会長の誕生が、「ニュースにならない時代」を一日も早く達成しなければなりません。
- 昨年、10月20日（金）東京ビッグサイトにて、総選挙のさなかにも関わらず、



800名もの出席を頂く中、2017連合中央女性集会を開催しました。私もパネルディスカッションに参加させて頂きましたが、連合事務局長としては初めてのパネラー参加とのこと。「それだけでも評価して！」と随分とハードルを下げた図々しい挨拶をしましたが、パネルでお話しした通り、「労働条件」、「政治・政策制度」という労働組合の伝統的な取り組みにもう一つ、「ジェンダー」をよりしっかり位置付けた運動の体系づくりも必要です。私たちの後輩たちから、「そんな時代もあったんだね」と一日も早く振り返られる職場や社会にしていくためにも。

3. 働き方

- 春季生活闘争を一つのステージに、取引の適正化をより意識した運動も徐々に拡がりを見せてきました。もちろん、中小労組やそうした仲間を組織する産業別組織など、関係者の長年にわたる努力が社会的な機運を着実に高めてきたことは間違いありません。心から敬意を表したいと思います。
- 一方で、より良い働き方の確立に向けては、長時間労働に代表される日本に深く根付く働き方の負の文化を根元から改めねばなりません。容易なことではありませんが、取引の「プライス」に着目したサプライチェーン・バリューチェーンの運動を活かす上でもより「働き方の連鎖」を意識した運動も大事です。
- 職場の一人ひとりが自らの働き方を改めることは、職場や企業を超えて関係する力

ウンターパートのワーク・ライフ・バランスの改善に働きかけることでもあります。またその過程では、職場のマネジメントのあり方などにも一層光りを当てて、建設的に、スピード感をもって課題を改めることも労働組合の重要な役割です。そのエネルギーは、職場のボイスにあります。

4. 賃上げ

- 先日、ある会合で報道関係の方から「この間、労働組合として賃上げに弱気ではなかったか。反省は無いか。」と率直に向けられました。労働組合への期待を込められたものと承知しつつ、「毎年毎年、真剣な協議と交渉が賃上げを支えている。その意味において反省はない。」「一方、現在の取り組みに不十分さを残せば、将来、必ず大きく反省をしなければならない。」と申し上げました。
- 『人手不足なのになぜ賃金が上がらないのか』玄田有史編（慶應義塾大学出版会）では、深刻な人手不足にも関わらず、市場メカニズムが想定する賃金上昇がみられない現状を踏まえ、第一線でご活躍中の研究者がその解析に様々なアプローチを試みておられ新鮮です。
- 2018春季生活闘争も目前です。私たちが、その結果に対し日本が抱える構造課題を言い訳にすることは許されません。魂のこもった継続的な賃上げを実現していきましょう！